

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41-2481(代)
発行人 西能正一郎

五省会ニュース

五省
一 至誠に情をなかりしか
一 言行に恥るなかりしか
一 氣力に終るなかりしか
一 努力に憾みなかりしか
一 不精に足らなかりしか

一枚札の紫式部

兼久文治



新春随想

私の子供の頃は百人一首の全盛期だった。正月の室内遊びといえはかるたと双六。いやでも百人一首を暗記せざるをえなかった。年始で親類、知人が集まると男性は専ら酒宴、女性や子供は食べただけ食べると、くじで

源平に分かれてのかるた会と決まっていた。今の若者は百人一首というテレビでみる礼儀正しい個人競技を思い浮かべるようだが、われわれのかるたは「源平」でも「ちらし」でもそんな厳肅さは微塵もなく、喧嘩があるだけだった。初めはおとなしいが次第に殺気立ってくる悲鳴や怒号が入りまじる。これにほろ酔いの若者が加わるものなら、髪は乱れ、羽織の紐はちぎれ、手にひっつき傷の乱戦になる。どさくさにまぎれて日頃嫌いなやつをぶん殴ったりする不心得者もいる。

部札を一つ歳下の従妹に奪われたのである。仲よしだったのが、日頃いろんなことでも私と比較される従妹は、対抗意識で、ねらっていたに違いない。手にしたとたん、私の方を見てにやりと笑った。その隙に血が上った。終つた後にもみじめだった。大抵は遠征組で十八番札の一つか二つに張りついて飛びつく役だった。私の十八番は「めぐり逢ひて見しやそれともわかぬ間に」という紫式部の札だった。「む、す、め、ふ、さ、ほ、せ」の一枚札だけに「め」の一声が勝負。これだけは必ず取った。小学校四年生か五年生の年だった。作戦をかえ、難しい「あ」の十七枚札を猛練習して臨んだ。それはうまく当たったのだが、おかげで、はずしたことのないう紫式部が読んだ。初めに新年のかるた会のシーンが出て

くる。かるたにことよせて金持ちぶらの富山をみんなど蹂躞するのを見つめたものだ。お宮の急激な心変わりには貫一は絶望する。人生の挫折感というものはこんなものかと思つくと、貫一の心がひどく輝いたまぶしいものに映った。

飾られていた。私はそれを見つめて泣いた。あのかるた会から何十年も生きて私は何度も、いろいろな挫折感を味わった。時には焦燥感、時には屈辱感、時には虚無感を伴った挫折感に、発奮したり、絶望したりした。しかし、私はあのかるた会の日のような純粋で、潔癖で、汚れのないう挫折感は今までも、これからは、もう味わうことはないだろう。それは今になってみると淡い淡い初めの失恋だったのかも知れない。

(北日本新聞「天地人」執筆)

足元を見直す年に

西能正一郎

あけましておめでとうございます。皆様お揃いであらたまの年をお迎えになられたことを心よりおよろこび申し上げます。四十年前にたたきのめされた日出る国日本は、世界の国々の寛大なお取計いと、絶大なご援助によって、思いもしなかつた日出る国へのカムバックを与えられました。目をあげて新春を見直してみませんか。

六・六増減案で国会は揉めにもめましました。誰が考えてもわかりきつた話を、自分達の目先の利益にとらわれて解決する力を失つた政治家がいます。教育の荒廃を、自分達のしてきたことの付けがまわつて来ていると気が付かず、いまだに他人のせいにして来ている教育者がいます。千葉勤労を支援するという理由をつけて、自分の国の誇りとする鉄道を麻痺させる自殺行為をする輩が、日本の米を食つて生きています。

足元を見直すことが忘れられております。世はあけて飽食の時代。好きなものを好きなだけ喰いちがらして成人病の基を作っているのですが、若しわが国にわずか一月、船が入つて来なかつたら、エネルギーはおるか食うものもなくなつて、南アフリカと同じ状態になるでしょう。貿易摩擦を解消するために円高が歓迎されておりますが、そのために中小企業の輸出が振るわず、未曾有の税収の落ち込みが懸念されております。世の中には調子の良い話ばかりがあるはずはありません。口を開けてボタモチを待ち、ボタモチが落ちてこなければ世の中が悪いと思つてはいけません。

自分を律し、打ち勝つ努力を

日本人の姿勢に「タナボタ」の甘さ

立山連峰から初日が輝き、神通川は悠々と流れております。これほど平和で満ち足りた私共の郷土に、このようにして生きさせていただいてくれること自体、夢のようなことであります。日本の国民は勤勉だと言われております。しかし勤勉であるというだけで現在の姿があるわけがなく、信じ難いほどの世界の国々の怨(ゆる)しに支えられて今があることを、私共は、あまりにも平和が長く続き過ぎたために忘れそうになつて

そうかと思つと、たつた一台のタイプライターで、當々と築いて来た会社を瞬間のうちにパニックに巻き込んだ子供の遊びに等しいことを楽しんでるかい。じん二十面相という大人のグループがあります。噛んで含めるように育てられて、ようやく成人したら結婚の費用まで面倒をかけるながら、親が齡取つて話が合いくなくなつたというだけで、夫婦手を取つて親の面倒見から降りてしまふ子供達がいいます。昭和元禄といわれる今は、あらゆるものが狂つて、

今の日本人の医療や福祉に対する姿勢に、これに似た甘さがないとはいえないところがある。養生といふ苦しいのぞんでいなくなつたことに打勝たねば、実効はあがりません。福祉を受けようとする人は、それを受けるに足る血の出るような努力があつて初めてその恩恵に浴する資格が出来るのです。昭和六十年代はもつと地道な日本人の生きざまを呼びもどさなければいけないのではないのでしょうか。

あすなろ

おめでとうございませう。昭和六十一年。目。物心ついたころから人々は年齢に見合った何度目のあすなろを迎えたい。

いつも同じ場所を迎えたい人はほとんどいないだろう。何度か住まいを変えたい人もあろう。年によつて自宅を迎えたいとは限らない。故郷で、赴任先で、職場で、あるいは病院で、旅行先で迎えたこともあつたに違いない。戦時中は戦場や疎開先や動員先で迎えたこともあろう。たとえ同じ場所でも身の回りにいる人など境遇は年々歳々同じではない。同じでなくても、ことある毎に生活に区切りをつけ心新たにスタートにづく心構えだけはいつも失つてはならぬと思う。それは新年こそ最もふさわしい区切りだ。区切りが大切なアルトイウ事ハヨク父上カラモ聞キシマシタガ今日一日ヨク緊張サユルメテ明日カラ又大死一番頑張り抜ク心算デアリマス。正月ではないが昭和二十年、五月の節句の休日に自宅に出した海軍兵学校の生徒時代の西能正一郎院長の一文である。この区切りは明日からの毎日の死に直面する区切り。十六歳の若武者らしい清々しい正義感と氣迫がみなぎつていて胸を打つ。「五省を心して反省し、日々新たなり」と少しでも進歩するよう努力致します」とも葉書にしたためて、日々新たに、昭和六十一年に立ち向かう区切りをつけたい正月である。

新年明けましておめでとうございます

昭和61年

医療法人 財団五省会

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-------|----|-----|----|-----|----|------|----|-----|----|------|----|-----|----|--------|----|---------|----|--------|----|-------|----|--------|----|-------|----|--------|----|--------|----|--------|----|--------|----|-------|----|---------|
| 理事 | 西能正一郎 | 理事 | 林敏彦 | 理事 | 住栄作 | 理事 | 米田寿吉 | 理事 | 岸口繁 | 理事 | 西能綾子 | 理事 | 石川実 | 理事 | 事 算田英二 | 理事 | 事 尾山征一郎 | 理事 | 事 稲垣忠一 | 理事 | 事 重松尚 | 理事 | 事 神沢幹夫 | 理事 | 事 西能孜 | 理事 | 事 坂本重一 | 理事 | 事 土田亮一 | 理事 | 事 豊田文一 | 理事 | 事 古沢富美 | 理事 | 事 堀政夫 | 理事 | 事 松井元太郎 |
|----|-------|----|-----|----|-----|----|------|----|-----|----|------|----|-----|----|--------|----|---------|----|--------|----|-------|----|--------|----|-------|----|--------|----|--------|----|--------|----|--------|----|-------|----|---------|

